

カンディンスキー『芸術における精神的なものについて』精読（２）

相 澤 正 己

III. GEISTIGE WENDUNG 精神の転換

この章のタイトルは、ハール=フォンテーヌによれば、ロシア語で書かれているすべての草稿では「精神の」がなく単に「転換」だけになっていて、本文ももっと短く、内容も異なっているらしい。ロシア語への翻訳作業をおこなったのち、ドイツ語原稿を印刷に回す直前に前半半分以上が書き足されたからのようだ（KBH149）。

問題とされているのは、依然として、ゆっくりと前進し上昇するあの「精神の三角形」である。その最下位に位置する最大の区域のひとつが、今日、物質主義的な〈信条〉の最初の標語に到達している、と書かれる。この区域の住人たちは、宗教的にはユダヤ教やカトリック、プロテスタントの信者などということになってはいるが、In Wirklichkeit sind sie Atheisten, was einige der Kühnsten oder Beschränktsten auch offen bekennen. Der „Himmel“ ist entleert. „Gott ist gestorben“. (K18)「実のところ、彼らは無神論者なのであり、もっとも大胆な者たちやもっとも知能の低い者たちの何人かが、それを公然たる形でも告白する。〈天〉は空になっている。〈神〉は死んでしまった」。政治的には、彼らは議会制支持者か共和制主義者である。Die Angst, den Abscheu und Haß, welchen sie gestern gegen diese politischen Ansichten hegten, haben sie heute auf die Anarchie übertragen, die sie nicht kennen und von welcher ihnen nur der schreckein-

flößende Name bekannt ist. (K18) 「こういう政治的見解に対して昨日は懐いていた不安や嫌悪や憎悪を、彼らは今日アナーキー状態の方に移行させたのだが、その状態を彼らは知らず、それについて彼らに知られているのは恐怖を起こさせるその名前だけなのだ」。経済的には、彼らは社会主義者である。Sie schärfen das Schwert der Gerechtigkeit, um der kapitalistischen Hydra den tödlichen Hieb zu versetzen und das Haupt des Übels abzuhaue. (K18-19) 「彼らは、資本主義のヒュドラに致命的な一撃を加え、悪の首を切り落とすために正義の剣を研いでいる」。

Da diese Einwohner dieses großen Abteils des Dreiecks nie selbständig zur Lösung einer Frage gekommen sind und stets in der menschlichen Karre durch sich selbst opfernde Mitmenschen, die stets hoch über ihnen standen, gezogen wurden, so wissen sie nichts von diesem Schieben, welches sie stets nur aus großer Entfernung beobachtet haben. Sie stellen sich deswegen das Schieben sehr leicht vor und glauben an einwandfreie Rezepte und an unfehlbar wirkende Mittel. (K19) 「三角形のこの大きな部分の住人たちは、いちども独力で何らかの問題の解決にまで到達したことがなく、いつも人間の車に乗っていて、いつも自分たちの上高くにいた自己犠牲をおこなう同胞たちに引かれていたものだから、いつも大きく離れたところから観察していたにすぎないこの押すという行為について何も知らない。それゆえ彼らは押す行為をひどく簡単と想い、申し分のない処方や間違うことなく働く手段があると信じてしまう」。人類の精神生活を象徴する「車」は、引かれるばかりでなく押されても「前進し上昇する」もののようだ。

Die folgende tieferliegende Abteilung wird von der oben beschriebenen blindlings auf diese Höhe gezogen. Hält sie aber noch fest an der alten Stelle, sträubt sich vor Angst, ins Unbekannte zu geraten, um nicht betrogen zu werden. (K19) 「より低いつぎの区域は、上で述べた区

域によって盲目的にこの高さにまで引き上げられる。しかし、まだ古い位置にしがみつき、未知の状態に陥る不安から、欺かれないために抗うのである」。定動詞 hält が文頭にあるのは強調と考える。

このつぎに書かれているのは、以上の区域よりは高次の区域の宗教的、政治的、経済的な様相である。宗教的には同じように無神論的であるにしても盲目的にそうであるばかりでなく、他者の言説によって根拠づけるすべが心得られているとされ、ドイツの病理学者ルードルフ・フィルヒョ（1821-1902）の言葉が引かれている。この言葉「私はたくさんの死体を解剖してきたが、その際いちどとして魂を発見したことはなかった」は、「学者には相応しくない発言」と評されている。政治的には、共和制支持者がより多くなり、議会制など政治問題にもより通じている。経済的にはさまざまなニュアンスの社会主義者たちであって、自らの〈信念〉を多くの引用で裏づけることができる、とされる。

この引用対象として、3人のドイツの社会主義思想家の名前が挙げられている。ヨハン・バプティスト・フォン・シュヴァイツァー（1833-75）とフェルディナント・ラサール（1825-64）、そしてカール・マルクス（1818-83）である。ここで、マルクスとともに挙げられている〈資本論〉、ラサールの〈鉄則〉は了解できるのだが、シュヴァイツァーの „Emma“（K19）〈エマ〉というのは何のことか分からない。

ところで、このラサールの das „Eherne Gesetz“（K19）〈鉄則（賃金鉄則）〉は、かつて法学徒、および経済学徒としてカンディンスキーがロシア語で書いた学位請求論文と深い関わりがある。1893年、27歳頃から彼が書いたこの論文のタイトルのドイツ語訳は、„Auslegung der Theorien des Ehernen Gesetzes und des Arbeiterfonds“『鉄則と労働者基金の諸理論の解釈』というのである⁽¹⁾。この論文がモスクワ大学に受理され、29歳のカンディンスキーはドルバト大学から講師として招聘されることになるのだが、彼はそれを断って、画家の修行をするべく30歳でミュンヘンに旅立ったの

である。この招聘を彼が断ったのは、ひとつには当時ロシア帝国領であったバルト三国にロシア人講師として赴任することが（ドルパト大学は現在のエストニアにあった）、ロシア帝国主義への加担になるからという問題もあったようである⁽²⁾。しかし、それよりも重要だったのは、学問よりも芸術こそが自分の生きる道であるという決断であっただろう。この当時、モスクワのフランス印象派展で観たモネの《積藁》と、宮廷劇場で体験したヴァーグナーの《ローエングリン》のあたえた衝撃が彼を芸術に向かわせたというのが、カンディンスキー自身が語る比較的よく知られたエピソードである⁽³⁾。もちろん、これらの出来事も重要であったには違いないが、それ以上に決定的だったのは、物質主義の陥穽から何としても抜け出さねばならぬという、彼の心のやむにやまれぬ強い衝迫だったのではないだろうか。ここの叙述を読むと、たしかに社会主義に決して好意的ではなく、カンディンスキーは保守的な右翼思想家のひとりなのかとすら思われる。しかし、ロシア革命に際して彼は決して反革命陣営に身を投じたわけではない。むしろ一定期間ではあるが革命に協力しているのである。とはいえ、唯物論的な社会主義によっては、魂ある存在としての人間を究極的に救うことはできないというのが彼の信念であっただろう。言ってみれば人類の霊的救済のために彼は学問の道を棄てて、芸術家になろうとするのである。

本文に戻る。問題にされるのは、引き続きより高次の区域である。先ほど述べた区域にはなかった、もっとほかの部門が次第に現れるとされる。科学と、文学と音楽を含む芸術である。

科学的には、この区域の人々は実証主義者であり、計測されうるものしか認めない。ここの *anerkennen* 「認める」が分離して使われていないが、この分離動詞が非分離動詞化するの是一般的にもあることで、別に間違いとはいえないようだ。計測され得ないものを、時として有害ともなる無意味と見なすこの人々は、今日〈証明された〉理論を昨日は同じような無意味と見なしていたのだ、と書かれる。

芸術において、彼らは自然主義者である。芸術家の人格や個性や気質を彼らが認め、評価もするのは、他人たちによって引かれて、それゆえに自分たちが揺るぎなく信じているある限界までのことなのである、と書かれている。要するに実証主義も自然主義も、いわば後ろ向きの現状追認的な立場であって、自ら現状を超え、新たな現実をつくり出す可能性に向けて開かれていない、という批判であろう。変革や革命を求める20世紀初頭の熱は、カンディンスキーにも確実に共有され（あるいは感染し）ていた。

*

*

*

In diesen höheren Abteilungen ist trotz der sichtbar großen Ordnung, Sicherheit und trotz den Prinzipien, die unfehlbar sind, jedoch eine versteckte A n g s t zu finden, eine Verwirrung, ein Wackeln und eine Unsicherheit, wie in den Köpfen der Passagiere eines großen, festen überseeischen Dampfers, wenn auf der hohen See bei in Nebeln verschwundenem festen Land sich schwarze Wolken sammeln und der düstere Wind das Wasser zu schwarzen Bergen auftürmt. Und dies ist dank ihrer Bildung. Sie wissen, daß der heute angebetene Gelehrte, Staatsmann, Künstler noch gestern ein ausgespotteter, keines ernstesten Blickes würdiger Streber, Schwindler, Pfuscher war. (K20) 「このより高次の区域には、はっきりと大きな秩序があり、確実さがあり、間違わない諸原理があるにもかかわらず、隠された、ある不安が見られる。混乱、動揺、不確実性が見られるのであり、それはちょうど大きく堅固な外洋航路の汽船に乗った乗船客たちが沖に出て、霧の中に陸地が消え、黒々とした雲は集まってくるわ、陰気な風が海水を黒々とした山に盛り上げるわというときに脳裏に感じるようなものだ。そして、これは彼らの教養のお蔭なのだ。

今日崇拜されている学者や政治家や芸術家が、つい昨日は嘲りの対象であり、何ら真剣に見られるに値しない出世主義者であり、詐欺師やいかさま師であったことを、彼らは知っているのだ」。20世紀を通じて指摘されつづけるであろう現代文明の高度な発達のもとの人間たちの精神状況の問題性が、直喩をつかってここにすでに見事に描かれているといっていよう。

「精神の三角形」を上にいけばいくほど、この不安と不確実性はよりはっきりしたものになると、つぎに書かれている。その第一の理由は、自分自身でも見ることで目と、構成能力のある頭脳が登場するからである。こういった人間たちは、叡智が、時とともに次々と新しいものに入れ替わっていくのを見る。今日の叡智が明日の叡智によって覆されるのは、「可能性の範囲内にあることだ」と言われる。

第二に、こういう目は、今日の科学によっては〈まだ説明され〉なかったものを見ることができる。科学の能力について、深刻な懐疑が生じる。

これらの区域には専門の学者たちもいて、現在では確定され学会によって認められている事実が、同じ学会によって初めはどのように迎えられたかを思い出すことができる。そして、芸術学者の仕事に言及される。昨日は無意味であった芸術を認知するような意味深い本を書く芸術学者は、その仕事によって柵を取り払い、新しい場所で今度は確乎として永久に留まるべき新たな柵を設置する。しかし、その古い柵も芸術はとうの昔に跳び越えていたのであって、新しい柵にしても、芸術の前ではなく後ろに建てられていることに学者は気づかない。学問は芸術を後追いするものにしかすぎないという主張であろう⁽⁴⁾。そして、この後追いは、芸術の外面的な原理は過去にしか通用せず、未来には通用し得ないことが理解されるまで変わることなく続くであろう、と書かれる。Es kann keine Theorie dieses Prinzips für den weiteren im Reiche des Nichtmateriellen liegenden Weg geben. Es kann sich materiell nicht kristallisieren das, was materiell noch nicht existiert. Der in das Reich von morgen führende Geist kann nur durch Ge-

fühl (wozu das Talent des Künstlers die Bahn ist) erkannt werden. Die Theorie ist die Laterne, die die kristallisierten Formen des Gestern und des vor dem Gestern liegenden beleuchtet. (K21-22) 「この原理の理論は、非物質的なものの王国にさらに横たわる道に対しては存在し得ない。物質的にまだ存在していないものは、物質的には結晶し得ない。明日の王国に通ずる精神は、感情（芸術家の才能が、これへの道を切り開く）を通してのみ認識されうる。理論は、昨日や、昨日以前にあるものの結晶化したフォルムを照らし出すランタンである」。この直後のカッコの中に（これについて詳しくは第7章理論を参照のこと）とある。

つぎの段落は、さらに高い区域について語る。そこで私たちが目にするのはさらに大きな混乱であり、それはあたかも、建築学上数学的なあらゆる規則に従って堅固に建設された大きな都市が、突然、計り知れぬ力によって揺り動かされるかの如くである。Hier ist ein Teil von der dicken Mauer wie ein Kartenhäuschen gefallen. Da liegt ein zum Himmel reichender, kolossaler, aus vielen spitzenartigen, aber „unsterblichen“ geistigen Pfeilern gebauter Turm in Trümmern. Der alte vergessene Friedhof bebt. Alte vergessene Gräber öffnen sich, und vergessene Geister heben sich aus ihnen. Die so kunstvoll gezimmerte Sonne zeigt Flecken und verfinstert sich und wo ist der Ersatz zum Kampf mit der Finsternis?

In dieser Stadt leben auch taube Menschen, die fremde Weisheit betäubt hat, die keinen Sturz hören, die auch blind sind, da sie fremde Weisheit geblendet hat, und die sagen: Unsere Sonne wird immer heller, und bald sehen wir die letzten Flecken verschwinden. Aber auch diese Menschen werden hören und sehen. (K22) 「こちらでは分厚い壁の一部が、カードでできた家のように崩れた。あちらでは、天にまで達する、巨大な、尖がってはいるが〈不滅の〉霊的な多くの支柱から造られた塔が瓦礫と化している。古くからの忘れられた墓地が震動する。古い忘れられた墓が口

を開け、忘れられた霊たちがそこから立ち上がる。かくも巧みにつくられた太陽が斑点を現わし、暗くなる。闇との戦いのための代わりとなるものは、どこにあるのか？

この都市には、異邦の叡智に聳された聳者も生きており、崩落を耳にすることはなく、異邦の叡智が目眩させたため盲いてもおり、こう言うのだ。我々の太陽はますます明るくなり、やがて我々は最後の斑点が消えるのを見る、と。しかし、これらの人々も聞き、そして見るであろう」。まるで聖書の黙示録の記述のようであり、こういう終末論的な幻視的イメージがカンディンスキーの心にとっていかに切実なものであったかがわかる⁽⁵⁾。

*

*

*

Und noch höher ist k e i n e A n g s t mehr zu finden. (K23)
「そして、もっと高くなると、もはや**何の不安も見られない**」。人間たちによって建てられた支柱を、大胆にも揺さぶるような仕事が行進する。専門の学者たちもいて、物質を何度も調べ、不安をいかなる問題にも懐くことなく（ここのドイツ語は、kein が2つ重なっていて若干疑問であるが）、ついにはあらゆるもの、全宇宙を支えていた物質を疑うに至る。電子の理論が完全に物質を代替するものになろうとしている、という指摘がなされる。ここで言われているのは、先端的な自然科学者たちの仕事の影響であり、破壊も辞さぬ戦い方で新しい科学の城を攻略しようとする科学者たちが、頑強な要塞に絶望的な急襲をかける自己犠牲的な兵士たちに喩えられているが、最後は〈奪取できない要塞は存在しない〉と結ばれている。

*

*

*

昨日の科学が〈ペテン〉というお定まりの言葉で迎えたこういう**事実**は、他方において数を増し、あるいはより多く知られるようになっている、と書かれる。たいていは、成功や下層民たちのもっとも従順な奉仕者である新聞にしてからが、〈奇跡〉の報道の皮肉な調子を抑えたり、やめたりする事例すらある。もっとも純粋な唯物論者を含むさまざまな学者たちが、このものはや否定することも、沈黙することもできない謎めいた事実の研究に力を注いでいる。

ここに注があって、さまざまな学者の名前やその仕事に言及されている。カンディンスキーは、当時最先端の科学の成果に目配りを怠っていないのである。

*

*

*

注

- （１） この論文のロシア語原文とハール=フォンテーヌによるドイツ語訳が、つぎの書物に収められている。Wassily Kandinsky: *Gesammelte Schriften 1889-1916*. Hrsg. von Helmut Friedel. München (Prestel Verlag) 2007. S.105-199.
- （２） Vgl. Nikolaus de Palézieux: *Der geometrische Punkt ist ein unsichtbares Wesen: Wassily Kandinsky und Arnold Schönberg*. Hamburg (Europäische Verlagsanstalt) 1998. S.13f.
- （３） Wassily Kandinsky: *Die Gesammelten Schriften*. Bd.1. Hrsg. von Hans K. Roethel und Jelena Hahl-Koch. Bern (Benteli Verlag) 1980. S. 32f.
- （４） 年刊誌「青騎士」（1912）編集に際して、もっぱら芸術家に寄稿を求め、学者や批評家は極力排除しようとした理由のひとつは、このあたりにあるかも知れない。
- （５） ここで太陽に現れる「斑点」（Flecken）であるが、2つの小原訳が「汚点」ないし「しみ」としているのに対し、西田訳は「黒点」と訳している。「黒点」では、しかし科学的に説明できる通常の現象であって天変地異ではない。ここはやはり太陽に大きな瘡蓋のような「斑点」が現れて、世界が暗くなるのでなければ

ばならないだろう。

附記：今回終えた部分の直後では、神智学や人智学に言及される。この部分に対処するためにはそれなりの準備が必要とされるので、今回はここまでとした。